



五百題癸句集  
五



序

和歌小類題集あり亦題林愚抄あり  
以まゝ爰小誹優の書故多あるを以て  
四季に雜物を標の事乃より加りて  
句意若涉深強弱虛實眼を過去  
乃此を不抱唯其影を採りて中座を  
振て送之り茲句を三日練て而後  
時の師小回題し如何しと云元録  
誦を以てて其書に思ふるを屢に乃

個人研究費  
雲英末雄  
56-04593

意と窺ふ風光乃河汰のこぼるる  
 句意此新古差別なく只流行よ  
 やる事以事世事聞中誠小美代不易  
 乃体と考る心意を起して古調の格  
 辛おもむき樂あそびの風雅ともいふ  
 事也然あそびの先師也善於  
 白旗居士古人此漢句と拾て守り  
 鏡とみればなるふ百駄の句集と撰  
 おうきし今年我十有七霜秋追憶

さらさら歌す依り以て存を  
 憂ふ世集も抱り自り古調と得  
 さるる思ふも別々なる  
 跡永く風光せり

不晴文化丁卯秋

白旗房

昨鳥誌



五百題茨句集

春之部

春秋菴白雄著

元日	元日や神代の事もかもとらぬ 元日やあまの事いねに表表 元日も旅人をとる驛の系	守武 千川 沾徳
門松	存雪の為にも志きし門の松 門松の若葉雪乃雪寒し 葉もや志きし戸をつら飾雪	去来 舟泉 濁子

春

一

蓬萊

蓬萊小見這かふそそきたさよ  
蓬萊いはいふ家宿るは蟹斗鮑  
喰はるは木曾の白ひの檜もは  
山店 岩翁 岱水

今朝春

袖すか又松の葉繁る今朝の妻  
朝夕の人もついでまたはれ妻  
船はるよ小生桂々まらし釣の妻  
梅古 宗因 一雀

立春

春きつやと船の雀乃額つき  
春ちややつまると利根の水境  
妻ちやや齒牙よとほる神木の根  
一髪 横几 許六

若水

若水やいよよ美し記為し水  
けつろやみら薬は結いしを  
若ろや凡千歳の釣飛繩  
武仙 野坡 風鈴軒

初日

湯色や大土巻若者もつ日新  
ものよあふまきまかふ初日山  
鯉乃養のまき氣をかき初日卦  
任行 観水 左柳

花春

善の妻連舟よと後や古袴  
新らとく子以思とあふまき初日妻  
草外り屋人二日そむの妻  
文鱗 丹野母 吼雲

萬歲

萬歳乃宿と隣ふ明又々々  
荷兮

初空

初空や鳥のさる牛乃鞍  
宗し  
露言

著初

母ここの故をうとや著と初  
可悦  
山蜂

初夢

初夢や瀧名の橋を今の日  
安室  
越人

齒朶

齒朶の世ふ刃よ包尾の鞆の及  
耕雪  
重五  
胡及

子日

生親根よ松をせり路とつ初の日  
去来  
紫帯

小松引

歌くや小松引の繋る馬  
引流る松や年く君の為

重政  
曲翠  
聴雪

若菜

初名や雪又漕るるの若菜船  
うち群てよ若菜摘ゆ又酔伝

嵐蘭  
仙枝  
其角

七種

七種やあふふうらふく咽鳥  
七種や松子らるる松極り著  
七種や唱奇好ある口はち

同  
湖月  
北枝

蕎

ぬきらばや若菜溢るる上たのる程  
おとくも教よ白く若菜の形  
草枕蕎うい人時こそそそ

嵐雪  
其角  
山川

芥

芥摘るとらけく酒ふと瓢か  
あつみの根芥摘く若菜  
十錢と得てし芥賣れ度なり

且藁  
千春  
小春

梅

灰押く白梅うもむ垣根うか  
白梅若菜くかきだれ中か  
梅の葉もの氣よ入らぬけいも

凡兆  
尚白  
越人

紅梅

一や葎の目割し新乃赤さうち  
よ梅は又娘すむらる妻戸の形  
るあま乃嘆く書あき世山哉

如行  
杉風  
風洗

柳

深きゆり瓢のくさく柳うか  
旭二か柳の軸く白しうな  
柳より轆もくく歌も伝

野梅  
荷兮  
其角

朧月

朧とは松の黒さくく夜うか  
三日月形さゆ色さる朧うか  
夕風は何吹あけそ朧有

同  
前川  
北枝

霞

白くやそ霧を系ぶく出城系  
むつりと岨乃枯ゆも霧さり

石口  
沾蓮  
杉風

朧夜

朧蕪と白酒堂の形影うか  
朧菫のうか高しあらん相の響  
疎きもた生ぬおとけの朧水

支考  
沾澍  
去来

春月

清くあつうさくさり春の月  
山の端をさうく影さる春の月  
云の平に旋る出くさり春の月

許六  
魯町  
沾徳



雪解

上 雪解き行くと柳を以て  
釣雪  
かまふもくも炭火くも雪をぬか  
青雨  
雪汁や蛤の寸場農す  
木白

残雪

残る雪比る鳥の舌くえきま  
正秀  
藪新や足輕町の残る雪  
加生  
船くると小生に雪れ残る  
且藁

雪間

州草を包む葉も好き雪間  
其角  
身振ひよ雪間の雑なれぬ  
轍土  
きんくお塔の雪間お栗系  
乙外

春雪

春の雪雨もくもゆふもぬる  
一笑  
飛鳥の丘より低く春の雪  
桃遠  
つよまてくくくも春の雪  
支考

糸遊

糸遊のいとあつとく虚木立  
氷圃  
いとゆるや物き簾乃人の糸  
乙外  
糸捲く糸ゆるやまの古芒  
乱糸

春雨

もの弱き中の塵染ま春の雨  
荊口  
春雨やいとゆる水静く  
紹雪  
いとゆる庭の鮎の子と運ぶ  
友五

東風

五 東風吹涼桶並ふ汐境 野あり  
六 鴨や東風よはきくの破塔 釣糸

陽炎

陽炎をみたり日よひにほりぬ 舟泉  
三 けしきおや馬の眼乃とらふと 傘下  
陽をみたり破りぬほりぬ 許六

長閑

のしきや漆の倉けしき有 荷兮  
もあふともものも思ふぬ相森小 杜國  
人乃母やも果ある日の寺林 其角

春日

春乃日の念佛ゆきとけきり 尚白  
たるふの思葉の木畑の小諸節 正秀  
舟橋も春日めらむ水のあや 沾徳

永日

もろこ日や油ト木のゆも音 野水  
職法のの念ふとく日影もあ 許六  
永き日や鐘撞く初もあぬと ト枝

春野

春の野やもろこ蔓の裾よほく 来山  
まのふかゆる人乃素顔か 一有妻  
あつ熱の光や春の糸糸 杉風

春水

のりまをぬくもよとゆいし  
うづき鯉ほかり春の水  
鬼貫  
舟泉

春海

青海や古鼓ゆまき春の海  
心はかり春山松や春の海  
素堂  
芳川  
松影や旭のより春の海  
不ト

春草

色く若もまはる春の中  
むしはるくゆく春の草  
珍碩  
来山  
春の花やしらぬの草はるかに  
鼠耳

若草

あの中ふはる春かきや  
の草や春を裁たる桐の苗  
野坡  
風睡  
この草や松ふけさふ蟻の道  
此節

蒲英

あゆみちや春もさぬ春の志を  
雨ら英乃つる春のぬ日並ふ  
山店  
普船  
さるんほや春ふさふ花盛  
圃箔

土筆

さるくは春はまはる春  
雲の雨志や春の春の春  
其角  
園指  
春の草やあの中ふはる春  
文鱗

落臺

意をなげける人の形を  
臺ちや海を越したる  
路の盡  
路乃や海を越したる  
路の盡

嵐雪  
子祐  
浪化

薊

薊のそまう子や薊の形  
海原や鳴るふもの  
鬼あやま  
木に薊旅して  
花をいふ

燭遊  
荒荏  
山店

莖

衣袖のすれぬ志の  
世に  
何の氣もはぬ  
まは地の莖を  
炮塚の土を  
踏むすれ草

季吟  
忠知  
野水

菜花

裸子の菜花は  
潜る日和  
衣乃  
地を菜の花が  
まは  
塊は  
菜花  
菜花

信昌  
不悔  
冬文

菊植

菊の名を  
忘れ  
まは  
菊の苗  
菊の苗  
菊の苗

生林  
簫山  
沾徳

杉菜

麻名山  
杉菜の  
ゆき  
丁  
玉  
杉菜  
杉菜  
杉菜

山店  
金峰  
田水

蕨

一より二のくわの外に松柳  
 沾徳  
 早蕨や浅敷いとぬる妻の親  
 山歩  
 越前の塩のくわよゆきと  
 全睡

芦角

川流や泡を休むふきの角  
 猿雖  
 中よりふきの角のくわのく  
 路通

萱

ちとつるをききぬるの野徑  
 野徑  
 藪あけくたち買ん朝まき  
 嵐雪  
 酒賢人の萱のくわのく  
 一露

麥青葉

ちとつるをききぬるの野徑  
 仙化  
 中麦や泊瀬まのくわのく  
 丑東  
 草麦のくわのく  
 沾徳

鶯

うぐいすのくわのく  
 式之  
 鶯のくわのく  
 筒指

鶯

うぐいすのくわのく  
 同  
 欄下ふきの角のく  
 羽色  
 鶯のくわのく  
 曲翠

駒鳥

駒鳥乃鷹の子也其性多根家  
厭暑く夏のかうられ也駒鳥の

傘下  
卯七

雉子

世の中は何はうに起るも其子  
うはくも其性多根家  
流毒もいけと雉子けらる

其角  
言水  
去来

鸚

る也待んあまると其性多根家  
雪を雀さ河原末胡や志の青さ  
便船やひらうれらるも潮雲

杉風  
一髪  
史邦

玄鳥

巢乃くも也身とゆりて親慈  
おとくもや埃多や門を去る也  
乙をもも津堂の左教之とく

峯嵐  
怒誰  
其角

雀子

巢をもちくも其性多根家  
縄うちん別と存のる飼う南  
日乃新也あもれらるの親雀

舟行  
河瓢  
珍碩

鳥巢

就るの巢の樟の枯枝は目入る也  
やま乃巢やすまの横もやまの巢

北枝  
北枝

春

十一

麦鷄

麦原さくさく種さる鷄さる  
しつと啼鷄乃麦の事ゆふ  
かみささかさかかきささうつ

沾徳  
諷竹  
波音

雲鳥

さうー鳥何さる雁さう這入也  
るさう餅さうさうれい志山

朱拙  
其角

帰雁

たち騒々今や紀の雁伊勢の鳥  
帰るさうおさうおさうの翮存  
麦さう雁さうさう別可申

澤雉  
丈中  
野水

凡巾

川のちりさう渡る小川さ  
は波や船さ揚る舟さ  
市中や馬ささう凡巾

舎羅  
如醴  
涼菟

猫戀

家さうや力さう猫啼猫の恋  
又さうさう飲猫のさうれ家

探丸  
川支

初午

青さう初午さうあけあけ  
さ川午や稚さう唯うら敏  
初午やあさうの乳母さう有末

沾荷  
川支  
沾徳

十一

彼岸

何とぞ彼岸の合人きこも  
戸障ふまのさかきも彼岸の  
橋の頭ゆくよ深院の彼岸の家  
支考

涅槃

尼の子の尼のありたる涅槃の家  
祇園人像赤き表具も眼よま  
負つてまゝ世のり涅槃像  
巖雪

出代

出代や稚さのさかきものさ  
出くもや傘さけてくまを  
出代や色すもももか快  
許六  
同

藪

藪入やおる海原の酒の酔  
藪入や心付いあるとやさ  
海にさるや沙のささるの海  
琴風

如月

さかきまやまのさかきの薬  
衣更もや松乃苗愛る松もも  
あまのまや大馬柳もむめ  
野水

寒食

寒の喰やその見ふあまの佛  
寒の喰の日旅人あまの飢つ  
寒の喰の日とけしらす涼飯  
立吟  
藤包  
桐雨



若

牙返

はらのえる神樂とら返しの巨魁  
雷やせらふくまきり牙のしん  
氷戸中ハ牙のくまきり田螺壳

泥足  
去来  
丈草

焼野

鳥のけり焼野の隅や月の末  
鳥に啼て焼野の表つる日か  
はゆ〜と焼野よとまき巖う系

猿雉  
乱糸  
由之

獨活

〜の長也は〜もあみ底あふ  
尋たや古ふ中の獨活中名爲  
落固あ〜さき〜と〜事誰志ん

山川  
杉風  
岩氷

麻落角

ぬ甲落〜は〜鹿野の麻の角  
角落〜て〜も〜小糸糸  
角落〜ち〜や落〜麻の友

澤雉  
蕉笠  
近之

椿

〜の〜も〜と〜や椿の胸の穴  
〜の〜も〜と〜椿の〜も〜音  
坐禅堂は〜椿〜笑〜る〜ん

洞木  
其角  
雪笠

若緑

むす〜の〜道の小ねや〜縁  
〜の〜の〜育〜も〜縁  
〜の〜の〜神の端〜も〜縁〜れ

涼菟  
土芳  
末山

古

春

五

海棠

海棠花既の睡みおちるまじ  
かひとけいふも満ちりあるの由

普船 洒堂 史邦

木爪

春の地や木爪の起る浦合  
草豆袋や地を暖く木爪の花  
砂川やるまじり木爪の系

沾徳 残芷 猿雖

木芽

なうんはくたすものも木芽  
暮は倦るも度もさる木芽  
青芽のかささうも木芽

露沾 鷓白 凡兆

指木

けし種唯おちるも面白  
さきとけいふも指木のきりかふ  
はささうも見のぬきさる指木

一笑 左次 舟泉

接穂

色垣とほりまやわやく接穂  
えなすもの系もあやうく接穂  
山嶺やとむりた接穂

起石 嵐雪 猿雖

余寒

のしげしやまのあまもこら  
竹もまきもつれさうよくれ  
僧正うそ言ふすむれいなき

利牛 路通 野童

春

五

蝶

傘法の眼は成際の家り、ふ  
てゝ花や相とまよひる系を夏  
找ふらむとみらるる胡蝶、ふか  
衣吹

蛇

人もまき、水と目と志を蛇の家り  
作向よまきもかた蛇乃足  
土芳  
星泉

蜂

蜂の巣の親いふ川も阿らもめ  
蜂とまよる小蜂の井や虫の幾  
腕首は蜂の巣かたる仁王、うぬ  
松芳  
蓬雨  
昌房

蛙

取はくぬ方ちのこゝはむ蛙、う系  
曉をむつ、うとさす、事、種  
けははくや蛙のすまゝ石のそく  
越人  
風睡

田螺

もの陰や田螺のまゝまゝの儀  
小桶、う田や、のに、る雨、お山  
湖を眺、のあち、に、田や、峰  
朱拙  
尚白  
尺中

蟻

うき、時、ら、蟻、の、ま、ま、も、む、事、山  
おも、や、し、も、ま、つ、て、る、り  
蟻、  
曲翠  
其角

靴

と記おろひきの羽靴一羽の蚕 陽和  
二麻に記く吟きくまする素ふい 知足  
青ふさく一太ふさぬの桐ふい 波圭

種印

種おろひの儀ふくくる小橋山 其角  
たのほきく濁もむむ小川ふ 弁石

苗代

苗代ふくくぬふ儀すくく外 子英  
時ふくく苗代時のふ田ふ所 正秀  
苗代ふくく居る處のふふふ 支考

田打

岸折の始や小田のふく記一 意柱  
ふと指もくく回とふ録まふ系 杖室  
因面を糸ふの田とふ夕ふふ 支考

畑打

初ももふくく圃ふ林藤ふふ 去来  
ちふくと畑ふふふふふ 好風  
畑ふちふ側ふふ鳥の物語 路茨

白魚

白魚ふくくぬふふふふ 其角  
ふふ魚ふ白ふふ白ふふ枝の箸 之道  
一一魚のふくく別ふふ破ふふ 木導

小鯨

鯨のふれをききし滝の音  
あ澄く細の目を記小鯨うか  
流臺へ今うちまきし小鯨うか

土芳

重政

嵐雪

柳鮫

春の水又秋のまはれを柳鮫  
けりあむその跡つむ柳うか

嵐雪

遠水

彼岸櫻

彼岸をとりいん櫻の雪も色  
ありよいきし櫻も年もある

彫棠

杜若

初櫻

初櫻あのをと琵琶の鳴るか  
袖さくくは雪のうまの好は  
らう櫻もさ追くさ雪は

調柳

和及

利雪

初花

初花は誰か傘をいまく  
なるあはしや初花より花の忌

長虹

野水

茶摘

午時の光もあや茶摘唄  
山畑の茶摘もあや茶摘唄  
春の光もあや茶摘唄

蚊足

重五

正秀

弥生

新雨くぐ卯の春春深き山  
三月やまのさゆ色の葉一本  
不二月流る三月七日八日か  
宗因 風國

峯入

峯入の宮も草鞋の旅旅山  
くみ入や越えおはる法螺の口  
宗因 去芳

上巳

桃の目や女便乃はきく  
弥生盲枕負ふふれあこの糸  
あまの目や解き美人よ撫る  
琴風 尚白 嵐雪

雛

石女の雛かはくくとあつる  
世ぬよき酒とんねりいふ  
雛と抱てくく麻桃と紫危  
其角 同 其流

曲水

曲水や管をすする客あはけ  
曲水やもさのゆき清瀬を  
其角 角上

園雛

園雛ももつとるし起鶴合  
巡禮も宗原も相も雛合  
其角 舉白

潮丁

春の帆の清海も舟もぬ汐丁の  
人潮丁も重なるる底  
三月月や汐丁の海も春

去来 昌川 八橋

桃

垣の柳枯れあぐの底も春  
春海も春も春も春も春  
数新て馬の息く春の花

灸山 北枝 孤屋

海苔

けりもや何よこもる海苔の味  
人の身も取もて後や梅のり  
海苔房や養る魚の中も春

其角 杉峯 野梅

海雲

海雲も春も春も春も春も春  
けりもや何よこもる海雲の味  
きのあつち海雲も春も春も春

峻水 菊齡 抱月

櫻

山さくらけりけりけりけり  
あつち春の醒も春も春も春  
朝さくらも美も春も春も春

仙化 自悦 雨芽

遅櫻

誰も母も春も春も春も春も春  
山さくらも春も春も春も春も春

祐圃 吏明

花

花の申下戸引てくる腕の糸  
去来  
木節  
亀洞

梨花

馬の耳よりをきき梨の香  
支考  
野童  
重政

酴醾

炬火よ山吹雪の色の  
野水  
襟雪  
越人

岩楯

堀おのけけりの楯も蟻のよる  
雪之  
尚白  
曲翠

春風

春風よ常ゆきたる花白うさ  
越人  
野水  
木導

別霜

ゆく病ははるおきおの別の家  
千那  
調柳  
吐竜



春

藤

誰々平部は安楽する藤の守りか  
山友の氣候をわらう枝葉うか  
あふ反志さるるも物なきかや

枳風  
卯七  
為有

春暮

思ひよ山にさるるものさよもの暮  
苗代よあつたまのあれと暮の暮  
赤梅のうらみくさるるあまらけ暮

鈍可  
乙由  
山店

行春

行ももむる春のゆきすれ  
暮もくさるるくさるる暮  
ゆきもあつたまのあれと暮の暮

野水  
林紅  
荊口

夏之部

更衣

衣うへ白らものよむればは  
垢魚の毒は了見し衣うえ  
又衣十目をやくい花さるる

路通  
嵐雪  
野坡

袷

そつねやおうー袷乃肩いつ  
涉簾より肉をさるる袷  
目ふやあつたまのあれと暮の暮

常欲  
乙由  
湖水

夏

七二

綿貫

糸貫や松風やうらたけの  
つらぬきや柳の葉のあかりく  
孫枝の目と菊目は浪ぶらぶら  
野水 木因 丹芝

青簾

夕やよよまきふねさうり  
み位六位色たさふてまき簾  
その色よいつもあまじりまき簾  
吟松 月下 嵐雪

灌佛

灌佛のそのは清くは  
去るの世とせられてまき佛  
灌佛や松の別寺の児  
尚白 助叟 其角

花御堂

花御堂は色飯の世乃  
寺くも涼しくある花御堂  
色く乃朝の糸や花御堂  
九節 乙由

花摘

花摘は花を摘み人に見の  
園伽楠よ花摘の芳きうか  
はまはまのささぎを摘むな  
言水 一有 賤水

夏

おもしろも敵とせぬすこと夏  
筑るうらむ日紅のあまの白まき  
千那 支考

短夜

短夜やそれ人らあそびやき  
その夜も短くお甲の力少く宛  
そぞろの好い飯やうさそめあそ

北枝  
嵐雪  
冬松

葵祭

葵祭かきとくしも半の浦  
破衣よ葵さあそび白ひく甲  
神も意葵のうさくうはうさ

言水  
去来  
几右

夏夜

夏の夜や禁火よ葵の西の里  
あつ乃よや孫今も宛ぬ酢の臭  
夏乃葵のあそびを神よ掛まり

且豪  
丸重  
冬市

子規

子規もよみ流るるよ子規のうら  
思羽啼りく風うあよあそび  
杜宇あそび戸街道もあそびし

山中  
利牛  
山店

鳩鳩

やうしと出く啼時う案うさ  
いひもふ目うあそびかんと鳥  
かんとあそびういよ指敷隣

山中  
具角  
陽和

卯花

卯の花の絶つるあそびかんの園の門  
うさあそび乳母あそび地垣根系  
卯のあそび草花の馬はあそびうれ

松風  
卯七  
許六

集

廿三

牡丹

上京のあはれを静し白りしん  
あふりれのふと牡丹のあふ  
月信のあはれをまふ牡丹  
木導

杜若

あふのあはれを静し白りしん  
あふりれのふと牡丹のあふ  
月信のあはれをまふ牡丹  
木導

嬰粟

あふのあはれを静し白りしん  
あふりれのふと牡丹のあふ  
月信のあはれをまふ牡丹  
木導

紫陽花

あふのあはれを静し白りしん  
あふりれのふと牡丹のあふ  
月信のあはれをまふ牡丹  
木導

葵

あふのあはれを静し白りしん  
あふりれのふと牡丹のあふ  
月信のあはれをまふ牡丹  
木導

燕尾軒

あふのあはれを静し白りしん  
あふりれのふと牡丹のあふ  
月信のあはれをまふ牡丹  
木導

百合

兼や百合を中く一毒の類  
琴の糸を現けに伸りけり  
ういひく百合と酒吞切らぬ  
半残 支考 柜雪

茨

美しく人よらるる花の中  
荒らぬ花をいひく也  
いへりもの啼か花は  
長虹 風睡 兆群

菱

いへり雑多な花をいひく  
菱のいとふ花をいひく  
形よる花をいひく菱の花  
乙外 五明 雪芝

骨蓬

河骨のふたのふたは  
かたむねの一端はよき  
河骨のふたは揚るふた  
英水 一露 同

藻花

渡りゆく藻の花をいひく  
藻の花をいひく  
もの花をいひく  
凡兆 胡及 夫中

萍

くさ草や花をいひく  
萍も侍のふたは  
浮中も花をいひく  
北枝 嵐雪 紫雲

藻川

一山ははるのつ穂や藻川舟  
古城や堀よりさだも川より  
氷花  
薯子

瞿麦

ふてゝゝの荷絵が人を恨らむ  
松子や菊のるも只つ麦一花  
斜影  
嵐薫

夏菊

甘き菊や小菊の白ふ新き  
夏にさすあゝおほき罪なき  
同  
亀洞

箒

とどろの跡よりふききる  
箒木や女その紙の松花  
鷺水  
柳雨

豇豆

うゝゝや小菊も動くは  
多きゆいむきやゆいゆい  
亀洞  
同

釣鐘

釣鐘草はよけりか  
涼菟  
越人

茄子

市小庭のきぬけけつとちゆあふ  
あらの敷あふ鼻む星有月あ  
いりまびんみ人よこつとる川あふ

蝶伽  
雪声  
同

覆雪

ふゆとの雪さる上は橋しつらふ  
あつて流るる入る覆雪さる  
失ひて又なれとけいふちあふ

千那  
杜旭  
系賢

蘭花

若直のきや流るるまぬき一雨  
おるるさふさふくあらの流るる

鈍可  
此節

芍薬

芍薬や二本折ていさ流るるけ  
芍薬のあふさふ入るるけ

杜若  
時吟

葱

あつてさる流るるあつて葱さ  
おるる何と葱のさる火打

ト枝  
ト宅

麦

麦の穂よこがれけりや小山伏  
あつて麦やこまれ垣向より  
川ぬき麦は白し垣向の内

才磨  
巴流  
利牛

葉撰

披莖の面りぬきわたりて葉撰の  
大鼓のけし焙炉のからぬ葉撰の  
松乃戸とて山を甲斐の嶽山

山店  
央邦  
嵐竹

麻

とるもや亡目麻外おろのま  
麻のくはぬ通に厚葉のふ  
あめりて紡織よあは極の麻

傀市  
斜影  
杜哲

青嵐

もさわりて定らけり青嵐の色  
よももふふ今をさりまき嵐  
も雨のき吹せりまき嵐

嵐雪  
青女  
素堂

着葉

浴してあふ葉のけりくろあふ  
よのけりもあふ葉のけりあふ  
むしめのかきあけ極のけりあふ

鈍可  
舎良  
素堂

茂

ひるあふあめり山のけりあふ  
あ乃茂流石女を名坪のけり  
金葉とぬりもあふあふあふ

去来  
杜若  
土芳

着楓

けの楓あふあふあふあふ  
ものけりあふあふあふあふ  
大あふあふあふあふあふ

曲翠  
嵐竹  
園指



桐花

桐の葉世間味なくも事なるなり  
夏はくろみけりゆり桐の葉  
神宮のぬきくはけり桐の葉

哺蒼  
其角  
史邦

柿花

此中濃古木のつぎ柿の葉  
洗濯のそよももむ柿の花

此節  
雪芝

棟

人ぬき棟のそよや村のもの  
町の根をからけり中の棟りな  
棟仰ていふとわりのやまき

次我  
鈍可  
嵐雪

橘

急橋や定ぬ札のあり處  
きもちぬやちあ良の都け土の臭  
まきやひ離り流のいといり口

杉風  
春洞  
桃憐

青梅

うまきはひあはれ梅のついで  
終なりふ小梅の枇杷のゆるぶ  
青梅やおのり梅はあまき

杜國  
土芳  
岩水

合歡

紅雲の事あ乃唱あ合歡の葉  
縹さけつるあれ海もあまき  
川流や紅むらあまきあまき

千那  
沾徳  
魚光

筆

升る也思の断のつ夫しき  
筍や杖と申し雲ふたぢふん  
併るよふ身と物も描のたを品  
許六

着竹

一枝のほをぬきし竹のつらぬふ品  
ききひ破るそのぬれと垢根ふ  
る併や煙乃出る庫裏の窓  
曲翠

復月

市中冬よもの白らけ夏のぬ  
馬うへくおくれをりもまをる月  
亦のこもるおぬえよりの夜月  
莫陵

复山

嚏のあとと静なるまお復入山  
夏山やも地とてもあし二曲  
夏山やまももさくも寺れか  
山店

复野

巡程の梅斗甲のりなせを分  
松練のみとらとらとら夏山  
啼るよふ唐のぶらけ夏地ふ  
任口

复木立

山依や夏ゆうのくも夏木もた  
橙や月よあつたけをる夏木も  
有るよふ海のむらひ夏木もた  
陽和

雜爰

卯の茶お世々の後者うし表  
浮中やいし流きものうし表  
緑毛魁の茶道うし表も翠月家  
同  
同  
不知

木下箇

下言や地魚かうし表蟬のうし表  
山鳥もきうし表のあふ山  
いもきうし表のうし表れ朝らけ  
几右  
嵐雪  
千春

昼森

いばきうし表田村のうし表の魚床ふ  
鼻紙の産をうし表に流るる魚床ふ  
滝らうし表若きうし表のうし表ふ  
可曉  
朱岫  
鶯舌

松奠

ふさぎの表櫻白ふさぎうし表  
表櫻やうし表うし表ふ葉のうし表  
並ても先きうし表水や初松奠  
岩水  
素堂

鱒

旅人うし表をのうし表層がうし表  
網うし表はうし表も深淵の鮎  
投網うし表はうし表たり砂のあふ  
雪芝  
横几  
近之

川狩

川狩や人けきうし表ゆきうし表  
持りやあ川の人をうし表  
親もふさぎうし表うし表あ川を  
由之  
陽和

麋

矢のトに世の乳をのむ麋よ山  
むしるゝ親らんかん麋のふか  
秋ちのくたも麋の子け額す  
立志 陽和 去昔

鹿茸

鹿の立ぬ思ひも麋の試る角  
牛乳も小競くゝ鹿乳は角  
小男鹿や樂しく生る代ゆつ  
かぐ 近之 雪芝

火串

火の串も出る公おらぬ火串は  
常くも火串も自ら山さ  
草の世も麋も搦男は火串光  
土昔 嵐竹 几右

蛭

傘とたみくちるも蛭も  
この世も蛭ももつるも車  
中もゆきちるも真さよみの言  
舟泉 孤山 正秀

其虫

其虫のつらもつらもつら  
すもたその蛭ももつらも  
沈灯小何里生るもつらも  
如流 昌房 蝶伽

蝸牛

批把のふもつらもつらも  
世もつらもつらもつらも  
蝸牛もつらもつらもつらも  
其角 友元 氷巻

枝蛙

雨蛙芭蕉のうらを戦ふなり  
枝蛙何れをうらよなきふまき  
其角 嵐雪

蝙蝠

このくち甲もなきは鹿也は馬格子  
かきゆり又起るしら道こそ善の櫛  
蝙蝠よ目をさく杉原白ひく  
荷竹 桃隣 小春

蝉

あふりやも土原もあふ蝉の鳴  
吐蝉乃清男指もなきたを  
夏の蝉涼もなきや果て声  
探志 杉風 乙州

蚊

このなき金糸かきくまき味申蚊か  
山里の蚊いさ中よ喰ひをきき  
旅人も睡るこの蚊のけし  
去来 沽荷

蚊火

蚊火たかきもあふる蚊はくは  
かや中よ片枯いふたる陣はこれ  
つゆの標よまきふ蚊まきこれ  
彫棠 百里 工齋

蠅

蚊をいりのと虫のうらの菴ふ  
物をもくも蚊を面ふも力復出  
物も中よ蚊もさきもゆき  
琴風 言水 末山

紙帳

素牛 其角  
 野徑  
 素牛  
 野徑  
 野徑  
 野徑

端牛

沾德  
 曙山  
 百里  
 百里

草蓆

一境  
 三筒  
 尚白

熾

胡及  
 嵐竹  
 百里

糝

嵐雪  
 西吟  
 言冰

競馬

周末  
 冰巷  
 孤屋

印紫

年々暮人の出や不地赤  
おもふ人は南ま不地の空に磔

溪石  
嵐雪

入梅

雨の脚赤まは梅色のあつら  
落の紫や柳の啼出久入春晴  
梅の可憐く中枯らする境くま

春中  
洒堂  
延年

五月雨

五月雨や如と素よ波淀の人  
湖のくままをるまきり五月雨  
世の人をせきく五月雨の軍の下

鞭石  
去来  
虎角

五月雨

五月雨や如と素よ波淀の人  
湖のくままをるまきり五月雨  
世の人をせきく五月雨の軍の下

探志  
式之  
其角

田植

田植や田植の廣く里田植  
軽乃血も物も種の間枝が  
咽ひそし田人の中おののこり

観水  
漁人  
土芳

早し廿

早し廿よけして居るは等々の奴  
つあしめをるるの家の境が  
老しつるもよこせらるる河田のれ

閻指  
言水  
景道

早苗

己そのりもよ苗のこころ里の蔵  
言水  
ふい裸文いってこころ早苗うの  
利牛  
つぎこころ極の血ぬこころ苗ふ  
弥子

青田

玉中やま田お入のまの敷  
許六  
四ふ日お産面おこま田お  
千山

秋葉

くおる葉々井おかこるを葉お  
河泥  
圃こちふお一極こあ鶴ふ  
倫女  
畑こるも終おこ味中こ鶴  
雪芝

草花

おこる葉お花川の葉の端  
土芳  
まゆりこ葉お花おまよるまよる  
露川  
川潮おお色夜きこ葉草  
言水

翡翠

川せまおおの道る川よ葉おき  
景道  
葉るまよるれ羽お葉おまよる川辺お  
如柳  
川せまおおあこまよるれ葉お  
嵐竹

水鷺

けりお葉て神杉浦こ流お  
尚白  
ふおれ葉てまよるまよる流お  
景道



羽鷺

羽ぬげきこよやまの嘴はくし  
ふあひの柳をきこむ羽鷺を  
返とく枝をさしむね鷺より

溪石  
波山  
立明

鶯音入

鶯音入くまこ音もわかこ音也  
まこと入るゆきも出る目もと山

土芳  
時吟

練雲雀

啼ねねの啼く終るねねを雀  
巨のねあいられ雀もね練雲雀  
舞疲のはくねあいらねね

陽和  
木取  
巴三

鶉

首まき鶉のはくろくも  
あふくちふ鶉とやあそめ鶉山  
世用数よあねとさる鶉新山

言水  
尚白  
園指

鶉飼

あまの川へ鶉よぬきけ鶉川山  
あそあいらねも啼く鶉飼山  
炬火もむらさきけ鶉飼山

言水  
越人  
同

鳩巢

飛乃北鳥よあそめよ鶉の浮巢山  
内川也鶉のうら巢小啼

嘯山  
其角

氷室

老乃齒のきつもくけ也氷室解  
暑より冷と氷室百は乃中の色  
六月は氷室村をり氷室守

貞室  
近之  
言水

土用

是未ふち刺り此入の人ら物  
土用人のいもひやも土用の水

杉風  
蚊足

土用

毎朝の飯も書もあるとり了  
土用も言希とと振つたつら花  
おもしろい時代よわわちお丁

貞室  
ト枝  
杉風

夏燕

夏燕毛羽のうらむとつら  
夏燕也焼灯をく泳の居

如真  
嵐雪

暑

日の暑熱の底をん鱗の飛  
ものこもかゝる暑の居  
た暑〜〜難〜〜ハ暑乃ある

凡兆  
雪芝  
木節

雲峯

麻の地々のあゝも未せ雲の居  
ハまきまの世陰漠とつら  
雲の峯を居るハも探のあ

史邦  
具角  
半残

水無月

あまの川や鳥のこゝろ大なる古  
六月の舟行ぬらひ振る曇るふ  
水無月臨波之こゝろ大井川  
涼菟

白雨

夕立や清涼園より日の夕  
ふるや山伏甲より入るるふ  
史邦  
万牛

涼

月涼は例のこゝろ雑魚競  
吾ら涼をたるともせよりなるとも  
涼はとほよ川蛤也凡の砂  
智月  
白空

清水

玉笹の二葉こゝろ新清く水々か  
山はるや花のこゝろふけはるや  
響の道のとこ中付たる志と川州  
園女  
露底  
徐寅

風薫

風薫るこゝろ重なるの石も  
洲の生やいふ形も目も月も  
つるこゝろは風薫る書也魏る  
轍士  
松涛  
景賢

心太

木の葉とととと中と文と書と心と  
四神と弱の樂と色と海と  
生乃木小葉をとりとりとてん  
秋之坊  
其角  
同

簞

竹也〜の漕の〜を福也  
木也〜も〜の〜の〜

露底  
馬笈  
其角

扇

扇也〜の〜の〜  
面白〜氣を〜

丹野  
伴自  
良昌

團

魚也〜も〜も〜  
か〜と〜

馬笈  
許六  
鬼演

蓮

蓮の〜の〜  
蓮の葉は〜

良昌  
湖春  
苔蘇

荷葉

蓮の葉は〜  
蓮の葉は〜

芥兮  
素堂  
明水

旋花

馬士農神の〜  
馬士農神の〜

且只  
言水  
道下

壺盧

夕影の山伏をれの暑くは  
 夕白のやうくうまの星の形  
 ゆふ影のあつては石燈をふりて  
 専吟 垢川 我峯

帷子

帷子のあつては何のあつては  
 帷子のあつてはまを待たうと  
 かたむくの日はまを待たうと  
 氷巻 丈中 万牛

夏衣

嬰児の世頃歩のあつては  
 袴や僧衣のあつては夏衣  
 縮の何れも縮れん夏衣も  
 尚白 鼠弾 含棘

汗拭

扇折のあつては汗ぬく  
 汗ぬくはあつては汗ぬく  
 南のあつては汗ぬく  
 千那 嵐雪 山店

祇園會

舟のあつては人の競も都つた  
 舟のあつては舟の競も都つた  
 舟のあつては舟の競も都つた  
 大中 其角 同

祭

扇のあつては祭のあつては  
 豆粉や袖のあつては里祭  
 扇のあつては祭のあつては  
 扇雪 許六 時吟

全書  
四十一

瓜

商人のこぼりてきる瓜  
日にお新やそよふ瓜のゆき  
瓜守の極み御宗をくしとる

湖月  
巴山  
其角

御稜

年の梅のまことそよふの梅  
河をどく瘡ちけむる清稜の  
鮎も鱗もこれつとてはとる川

翠紅  
荷兮  
其角

